

# みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ものづくり研究における素材、道具、技術：  
各個研究：ラクダ牧畜社会のものづくり研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4366">http://hdl.handle.net/10502/4366</a>

プロジェクト

# ものづくり研究における 素材、道具、技術

各個研究：ラクダ牧畜社会のものづくり研究

文・写真 上羽陽子

## ものづくり研究

私をはじめてインド西部・カッチ県を訪れたのは、大阪芸術大学工芸学科において染織を専攻していた1996年であった。その後、私はカッチ県で制作されている織り、絞り、木版更紗、刺繍、アップリケなどといった染織技術に魅かれ、この地を訪れるようになり、数多くの民族集団のなかから、女性たちが刺繍技術による衣裳や調度品、男性たちがラクダやヤギの毛を紡いだ糸を用いた編・織技術によって放牧用具を制作するラバーリーに興味をもつようになった。そして、彼らの手工芸品をとりまく世界観を探るために1997年から、おもにラバーリー



ラバーリーはヒトコブラクダを飼育して、それらを使役として販売している。

一の刺繍や編・織技術をはじめとする手工芸品の技術的調査や命名儀礼、結婚儀礼などの通過儀礼を中心とした民族誌的調査を、つくり手の立場、視点にたって進めてきた。

ものづくりにかかわる研究においては、ものの素材、道具、技術を見極めることが重要である。この点については、素材を見極め、そして素材の違いから派生する技術や道具の相違や特性を判断することができこそ、ものにかかわる真の基礎的データを収集することができ、そして、そのことによってこそものにかかわる人びとの社会・文化・歴史を捉えることが可能になると考えている。

たとえば、ラバーリーの男性は道具をいっさいもちいず、身体のみを利用して放牧用具袋を織っている。ここでは、その制作工程と織技術の特徴を紹介したい。

## 素材、道具、技術

この放牧用具袋の織作業は単純な制作工程に見えるが、私はいくつかの興味深い点を観察した。まず、この織作業では、織の最低条件であるタテ糸を平行に並べて固定させる、均一な張力でタテ糸を張ることができる、タテ糸に対してヨコ糸が垂直に交わっている、タテ糸を張った状態で両手が使えるなどといったことがそろっているという



ラクダとヤギの毛で紡いだ紐をもちいて織られた放牧用具袋。

ことである。つまり、この「身体機」による織技術はタテ糸を1本ずつすくいあげる、綜統<sup>そうどう</sup>發明以前の織技術のひとつなのである。

この綜統とは「織物」を製織するとき、偶数あるいは奇数のタテ糸をいっせいに引き上げてヨコ糸を通すために開口する道具である。タテ糸を開口させるためには、ラバーリーの放牧用具袋のように指先でもタテ糸1本1本すくいあげられないことはないが、非常に手間を要し、非効率である。染織界の知見では、「織物」は「編物」から発展したものと考えられている。そして、その発展の鍵となるのが、この綜統なのである。つまり、綜統の發明から、綜統をそなえた織機によってつくられる「編物」が、次第に他の「編物」から独立し、最終的には「編物」とは異なる別の概念つまり、「織物」としてとらえられるようになった、つまり、編技術から織技術への技術的発展には綜統の發明が重要であり、編技術に綜統を取り入れることによって高度な織技術へと変化したと考えられるのである。

つまり、ラバーリーの放牧用具袋の制作技術は、タテ糸を指で1本1本すくいあげる綜統發明以前の織技術の形態であることが明らかである。ただし、ラバーリーの「身体機」で制作される織維素材は柔らかく、太い紐を使用し、タテ糸の本数が少ないことが条件となる。

また、特に注目したいことに、この放牧用具袋の制作工程において、ラバーリーの男性にはタテ糸とヨコ糸という意識が明確にあるということである。彼らは「織る」という動作を「ヨコ糸をタテ糸の上と下に通す」と説明している。一方で彼らは編技術も保持しているが、この編技術と織技術とは明確に区別をしている。この



タテ紐保持紐を両足の親指と両膝に引っ掛けて矩形をつくる。このタテ紐保持紐による矩形が道具をもちいない「身体機」としての役割を果たす。そして、タテ紐をタテ紐保持紐の撚りの間に通す。

ことは今後、編技術から織技術への技術的発達  
の比較検討をおこなってゆく際に、制作者の意  
識を探る鍵になるのではと考えている。

では、なぜ、ラバーリーの男性たちはこのよ  
うな技術を継承しつづけてきたのであろうか。  
まず、ラバーリーの「編・織」技術を観察して  
みるとこれらの技術上の特性は、紐の撚りの間  
に別の紐を「挟みこむ」「通す」「繋ぐ」「固定  
する」ことであり、すべて紐の撚りをうまく利  
用しているのである。ラバーリーの男性は、自  
分たちで糸を簡単に紡ぐことができ、さらにこ  
の糸を撚り合わせて自ら紐の制作もおこなうた  
め、紐の撚りの強さの調整も容易にできるので  
ある。また、山羊の毛は他の繊維素材である羊  
毛や木綿に比べて硬く弾性に乏しい粗毛である  
ことから、強く撚りを掛ける必要があり、他の  
繊維素材より糸紡ぎがおこないにくい。そのた  
め、他の繊維素材の糸紡ぎ技術よりも巧みな技  
術を要するのである。そして、このことがラバ  
ーリーの男性の糸紡ぎ技術の向上となり、強く  
撚りの掛かった糸や紐をもちいて放牧用具の制  
作をすることから、強度の増した耐久性のある  
放牧用具の制作をおこなうことができたと考え  
ている。

たとえば、移牧や放牧中に使用している紐が  
切れた場合、彼らは紐を結ぶのではなく、もう  
1度撚りを掛けて繋ぎなおすということを簡単  
におこなっている。これはできるかぎり余分な荷  
物を持ち歩かないという、移牧や放牧生活のな  
かでの習慣から、切れた1本の紐でさえ何度も  
撚りなおして使いつづける彼らの生活の知恵で  
ある。そして、自ら糸に撚りを掛けて紐を作る

ことのできるラバーリーの  
男性の技巧が、さまざま  
な編技術や織技術に上手  
く活用されて、今日まで  
継承されつづけていると筆  
者は考えている。

また、ラバーリーの男  
性が制作する放牧用具は  
あくまでも彼ら自身が使  
用するためのものである。  
彼らの生業は牧畜であり、  
飼育している家畜やその  
乳を販売して生計を立て  
ている。私は、ラバーリ  
ーの男性がこのような技  
術を今日まで保持しつづ  
けてきた要因には、販売  
目的ではなく、自家用に  
制作をおこなっているこ  
とが深くかかっている  
と考えている。つまり、  
もし、ラバーリーが販売  
することを目的として放  
牧用具を制作し、生業と  
していた場合、これらの  
放牧用具は商品として制  
作されることになり、早

く安く仕上げるための技術的な改良が必要とな  
るのである。実際に糸紡ぎ作業をおこなった者  
には容易に理解できることだが、糸を紡ぐとい  
う労力は大変なものである。そのため、販売用  
であれば実際に自ら糸を紡ぐことを止め、工業  
製撚糸や工業製紐を購入したほうが効率がよい  
のである。

しかし、ラバーリーの男性には、このような  
早く安く仕上げるために効率を上げる技術的改  
良をおこなう必要はない。自ら入手することの  
できる繊維素材をもちいて、手間を省くことな  
くひとつひとつ丁寧につくりと、自家用に  
制作してきたことも今日まで技術を保持してき  
た重要な原因であると考えられる。

## 今後の展望

現在でもラバーリーのように牧畜をおこなっ  
ている民族集団のなかには、ラバーリーと同様  
に編技術から織技術への技術的発達を探るため  
の重要な過渡期的技術がまだ残されているので  
はないだろうか。研究を進めてきたラバーリー  
がアラビアを起源とされていることから、これ  
までのインド西部での研究を起点に、インド西  
部から西アジアまでの地域の牧畜社会、特にラ



途中でヨコ紐の色を変え、ジグザグ文様になるように織りすすめてゆく。



半分に折りたたみ、余分なヨコ紐を調節しながら袋状に仕上げる。

クダを飼育する牧畜民に焦点をあて、彼らのも  
のづくりを通じて、素材、道具、技術を中心に  
人びとの活動や地域の特性をフィールドワーク  
によって技術誌的・民族誌的に調査研究をおこ  
なう予定である。特に、牧畜用具の製作技術に  
焦点をあて、ラクダやヒツジなどの有用動物の  
素材利用に関する素材・道具の諸相を明らかに  
すること、そして、これらの素材・道具を用い  
る技術が各々の社会の中でどのように習得さ  
れ、活用されるかといった在来技術・在来知識  
の特徴を明らかにすることを計画している。

## うえば ようこ

文化資源研究センター助教

専門は民族芸術学。主として牧畜民のものづく  
りに関する技術・民族誌的研究

著書に『インド・ラバーリー社会の染織と儀  
礼：ラクダとともに生きる人びと』（昭和堂  
2006年）、論文に「インドの手工芸と振興活動：  
ラバーリー社会を事例に」（デザイン史フォー  
ラム編『近代工芸運動とデザイン史』思文閣出版  
2008）など